



寮の友達と

政策をやめて民主化を進めるなど、世界情勢が一変した。南アフリカが政策を転換した背景には、経済封鎖による経済の疲弊とそれに伴う民衆の不満が大きく影響したことを、ACの同級生だった南アフリカの友人が手紙で伝えてくれた。

経済は、紛争の原因にもなるが、紛争の解決手段にもなるのではないか。こう考えた私は、就職先を決めるとき、「先進国の経済を支え活力を産むのは企業の力、この活力を途上国にも波及させたい」と思い、アジアで事業を広げる富士ゼロックスで働くことにした。幸い、二〇〇〇年から二年間、会社等の支援により、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の高等国際問題研究大学院(SAIS)で国際関係論を学ぶ機会を得ることができたので、「二国間紛争に経済関係がどのような影響を及ぼしている

か」と題する修士論文に取り組んだ。紛争をしている二つの国が比較優位を形成し経済の相互依存が構築できている場合には、民間の経済関係が深まることで、紛争の悪化を防ぐことができる」との結論を導くことができた。民間の経済関係の効果に着目した視点が評価され、学科の最優秀論文賞を受賞した。

### 👉今、企業ができること

ACでの経験をもとに育んできた「世界の紛争を減らしたい」という思いは、SAISでの研究成果につながり、民間企業もその一翼を担えることを確信できるようになった。そして、今は、富士ゼロックスで推進しているCSR(Corporate Social Responsibility 企業の社会に対する責任)をアジアの関連会社にも広め、ゆくゆくはアジアの平和に貢献できる会社になりたいと考えている。

CSRで重要なのは、一国のGDPを上回る経済力を持つ大企業が増える中で、世界が抱える南北問題の解決に企業がどのように貢献できるか、言い換えれば、企業が進出している開発途上国でどのような事業活動をすればその国の経済や社会の水準を上げることができるか、を企業が自ら問うことだ。富士ゼロックスが、これからさらに海外関連会社のCSRを推進していく上で、当然ながら各国の異なる法律や文化を

尊重しながら何をどのレベルまで取り組むのかという試行錯誤は続くし、現地の従業員や地域社会の意見を聞くことも増えるだろう。異なる文化や価値観を持つ人々と議論する時には互いの違いを受け入れることが大切だという、ACで体験した教訓を活かしていきたい。

### 👉これから日本の高校生に機会を

UWCは奨学金制度で支えられている。多様な国籍、宗教、人種、家庭環境の高校生が留学でき、同じ条件で寮生活を送ることができる。同級生の中には、南米屈指の資産家の子息や欧州の貴族の血を引く者がいる一方、二カ月の夏休みを過ごすお金に困る仲間もいた。はじめは、意見の相違による衝突が起こるが、そのうちに多様性を受け入れ、お互いを理解しようとする姿勢が生まれる。相手を理解しようとする姿勢は、人と人がかかり合いを持つ社会で、すべての基礎になると思う。

私は二〇〇三年に一児の母となり、子供の世代が戦争のない世界で過ごして欲しいと思う気持ちがあります。強くなった。ACでの経験が、私の心を揺り動かし可能性を広げてくれたように、一人でも多くの志や夢を持つ日本の高校生がUWCの生活を体験できるよう、各企業からの支援を継続していただきたいと思います。

# 経済は紛争の解決手段にもなる

富士ゼロックス品質・環境経営部CSRグループ

渡辺美紀

わたなべ みき

一九八六〜八八年UWCアトランティック・カレッジ(英国)。一九九三年三月横浜国立大学経済学部卒業。同年四月富士ゼロックス入社。総合企画部、経営総合研究部を経て、二〇〇二年五月米国シヨンス・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)修了、修士号(MA)取得。長男出産のため休職後、二〇〇四年十月より現職。



## ▼エジプトの窓から

ストリートチルドレンがヤギを連れて歩いている。小学生の頃に過ごしたエジプトの家の窓からの光景である。その姿を見て「自分はなぜ彼らと違うのだろう、生まれた家庭や国の違いだけかな」と疑問に思った。それが、私が世界に興味を持つきっかけだった。

「もっと世界を見たい」。エジプトから帰国後、公立の中学校・高校に通いながら抱いていた思いは、UWC日本協会から奨学金を得て、アトランティック・カレッジ(AC)に一九八六年から二年間留学することになった。そしてACでの経験を通じて「世界の紛争を減らすことに貢献したい」

「紛争の原因の多くに経済的な理由があるが、紛争解決の手段としても経済を活用できるのではないか」と考えるようになった。この気持ちは今も変わらない。

## ▼私の原点となったアトランティック・カレッジでの二年間

ACには当時、約七〇カ国から学生が集まっていた。友人たちとの対話を通して、日本にいた頃には考えられなかった地域紛争を身近に感じる事が度々あった。トルコとギリシアの紛争の舞台となっているキプロスから来た友人は、結婚を約束した恋人が兵役につくことになり最前線に立つ可能性もあると心配していた。内紛で家族の

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業生を輩出している。

消息がわからないエチオピア人の友人は、家族の話になると寂しい目をして多くを語りたがらなかった。私は初めて親元を離れたの寮生活だったのでホームシックになることもあったが、この友人たちにそんな甘えたことは言えなかった。「なぜ彼らがこのような悲しい思いをしなければならぬのか、紛争の原因はどこにあるのだろう」と疑問を抱くようになった。そしてできれば、世界の紛争を減らしたい、と。

紛争の原因に経済的な理由が多いのではないかと考えるようになったのはACの「西洋近代史」の授業を通してだった。二つの世界大戦の原因や結果について、主要国がどういう立場で、どのような目的でかわったか等、さまざまな視点で議論する中で、経済的な理由から戦争の道を選ぶ国が多かったことを学んだ。

ACに行くまでは経済学には全く興味がなかったが、紛争の原因となる経済の理解を深めるために、横浜国立大学経済学部に進学した。大学時代には、ソ連の崩壊で冷戦が終焉し、南アフリカがアパルトヘイト